

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K03000

研究課題名(和文) 中央ヨーロッパ・ドイツ系中等学校の比較研究 - 国家・地域を越えたシステムの検討

研究課題名(英文) A comparative study of Central European and German secondary schools - an examination of trans-national and trans-regional systems.

研究代表者

進藤 修一 (SHINDO, Shuichi)

大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・教授

研究者番号：80294172

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：中央ヨーロッパを網羅するドイツ語系中等学校(ギムナジウム)のネットワークの仕組みを調査し、学校における教育内容の質保証にもつながる「学校年報」の制度と機能を明らかにできた。特にドイツ語が使用言語のメインではない言語境界地域における学校群については、新型コロナウイルス感染拡大前の調査である程度の資料を収集できたが、その後補足資料の入手に困難が生じているため、評価についてはこれから継続して実施する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在のEU統合や教育のボローニャ体制につながる、国境を越えた学校のネットワークが中央ヨーロッパに存在し、その仕組みを明らかにすることができた。また、19世紀後半以後の社会の「資格社会化」に伴う教育の質保証が、どのような形で確保されていたのかが明確になった。

研究成果の概要(英文)：In this Project would investigated the structure of the network of German-language secondary schools (gymnasiums) covering Central Europe and clarify the system and function of the "school annual report," which also serves to guarantee the quality of educational content in the schools. In particular, it was able to collect a certain amount of data on school groups in border areas where German is not the main language spoken, through a survey conducted before the spread of the new corona infection.

研究分野：ドイツ教育社会史

キーワード：ドイツ近現代史 教育社会史 中等学校 中央ヨーロッパ ギムナジウム 学校記録

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

この分野の先行研究においては、ドイツ一国的史観を中心としたものがほとんどで、中等学校のトランスナショナル性、多様性、そしてそれが地域を超えた「システム」を持つことはほとんど認識されていなかった。ドイツ教育社会史研究は 1970 年代から盛んに取り組み、80 年代になると「学校の社会史」という形でさまざまな研究成果が出されるようになる。その一例はドイツ研究協会(DFG)による「教育制度における資格付与の危機と構造変動」というプロジェクトであり、ここから多くの研究成果が生み出された。このプロジェクト(1977-82 年)は、数多くの歴史資料を用いて中等・高等教育における学生の社会的出自、宗教、年齢などを数値化し、これが計量的な研究に資するさまざまな教育データを収めた *Datenhandbuch der Deutschen Bildungsgeschichte* のシリーズとなり(1987 年から刊行、現在まで続く)また同年、15 世紀から現代までのドイツ教育を概観する *Handbuch der Deutschen Bildungsgeschichte* シリーズの刊行も始まっている。我が国ではやや遅れて 1980 年代より 19 世紀の諸学校に関する研究が大きく発展したが、マルガレート・クラウルの「Das Deutsche Gymnasium 1780-1980」が『ドイツ・ギムナジウム 200 年史』として邦訳され、これが教育社会史研究の嚆矢とされるが、同書では「本書ではギムナジウムという学校類型の発展が(中略)示される」(下線・中略、筆者)ということが明確に示されており、この研究は実は制度史の側面が強い。

19 世紀ドイツ語圏における中等学校の生徒を対象とした社会史的研究の中に、地域間の流動性を取り上げたものは少ない。この事実はこれまで注目されてこなかったいくつかの問題を提示する。そのひとつに、中等学校間でどうやって教育の質保証がなされていたのかが解明されていないことが挙げられよう。このころのギムナジウムでのカリキュラムは明らかにされており、どのような科目がどれだけの時間数行われたのかについてはわかっている。だが、授業の内容や教員の質などについての検討はなされていない。そこから逆説的に言えば、ギムナジウム生徒の地域的流動性(出身地と学校所在地の違い)が高かったことで、カリキュラムや教員の再教育において、一定の質を担保する仕組みがあったのではないかという仮説が示される。とりわけ、ドイツや中欧地域は連邦主義的傾向が強いにもかかわらず、生徒が地域を超えて移動していたということがその根拠となる。現在のドイツでは学校に関する権限(文化高権)が州に属する分権的しくみであるため、連邦内で一定の調整機能を有する。とすれば、19 世紀においてもなんらかの形で同様の制度や機能が存在したのではないだろうか。このような背景のもとに本プロジェクトはスタートしている。

### 2. 研究の目的

本研究では「トランスナショナルな社会における諸要求の結節点としての学校」という観点に立ち、19 世紀後半から 20 世紀初頭に向け、中央ヨーロッパ全体に広がっていたドイツ語系中等学校を研究として取り上げ、既存の研究に欠落していた諸問題を明らかにする。この研究により、中等学校史を書き直し、新たな中央ヨーロッパ像を提示する。

### 3. 研究の方法

ドイツ各地に所蔵されている「学校記録」(Schulprogramme, Jahresberichte, Schulberichte, Abhandlungen)を調査し、中央ヨーロッパ各地に所在した中等学校の実態を探る。ドイツにおいてはいまでも「学校年報」Schulprogramme が発行されている。しかし現代のそれはいわゆる「学校案内」の性格を出ない。本論で扱う「学校年報」とは 16 世紀からドイツ語圏の各中等学校で発行された年報であり、まったく異なる機能を有していた。その呼称は Jahresberichte, Schulprogramme, Schulnachrichten, Schulschriften, Programmliteratur, Gelegenheitsschriften など、さまざまである。すでに述べたように学校年報の最古の例は 16 世紀にまで遡るが、18 世紀になると広く普及し始めることになる。教員がこの学校年報に関与することになった背景のひとつとして、プロイセンで 1824 年に定められたギムナジウム試験に関する規程が挙げられる。この規程でギムナジウム教員による研究の成果や学校の教授内容、修了試験(アビトゥーア)にかんする情報を年報の形で公刊することが義務づけられた(実際に義務化されたのは 1825 年から)。このようにして、学校年報はいわゆる「官報」として扱われるようになった。1872 年になると、学校年報への学術論文の掲載義務がなくなるが、その後、教員の学術論文は別冊(Beilage)として発行されることが多くなった。また、19 世紀に入ると、プロイセン以外の邦において学校年報の発行が義務化され、バイエルンでは 1825 年、ザクセンで 1833 年、バーデンで 1836 年である。このように、ドイツの各邦で学校年報の発行が義務化されたことにより、邦を超え、ドイツ全土の学校間で学校年報を交換し、普及するきっかけが生まれた。1831 年にはフランクフルト・アム・マイン、リュベックといったかつての帝国都市の学校もこの交換ネットワークに合流し 1836 年になるとザクセン王国、ヘッセン大公国のギムナジウムがプロイセンの学校年報交換制度に参加した。このように、学校記録は、中等学校史研究の第一級資料として価値のあるものであるが、日本におけるドイツ教育社会史研究では全く利用されていない。

この資料を用いて本プロジェクトでは研究を進めたが、その柱は 1) 地位的多様性(生徒の

出自、移動など)、2)学校と地域の関係性、3)これらの調査結果を総合し、中央ヨーロッパ中等学校システムの全体像を探る、という点である。

#### 4. 研究成果

進藤修一「ドイツ学校制度の200年 社会における変化の結節点としての学校」、森井裕一編『ドイツの歴史を知るための50章』明石書店、2016年、所収。

谷口健治、南直人、北村昌史、進藤修一編著『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2020年。

進藤修一「二つの世界大戦の時代 第一次世界大戦～ナチ時代」、谷口健治、南直人、北村昌史、進藤修一編著『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2020年、所収。

進藤修一「学校からみたドイツ史 社会におけるその機能」、谷口健治、南直人、北村昌史、進藤修一編著『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2020年、所収。

進藤修一「学校年報」から見るドイツ中等学校の世界：19・20世紀ドイツ語圏におけるギムナジウムのネットワークに関する史料状況』、『Sprache und Kultur』42, 2023年

ドミニク・ゲッパート『ドイツ人が語るドイツ現代史』進藤修一、爲政雅代訳、ミネルヴァ書房、2023年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 進藤 修一	4. 巻 42
2. 論文標題 「学校年報」から見るドイツ中等学校の世界：19・20世紀ドイツ語圏におけるギムナジウムのネットワークに関する史料状況	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Sprache und Kultur	6. 最初と最後の頁 33～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90040	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計5件

1. 著者名 南直人、谷口健治、北村昌史、進藤修一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 346
3. 書名 はじめて学ぶドイツの歴史と文化	

1. 著者名 進藤修一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 16
3. 書名 二つの世界大戦の時代 第一次世界大戦～ナチ時代	

1. 著者名 進藤 修一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 20
3. 書名 学校からみたドイツ史 社会におけるその機能	

1. 著者名 森井裕一	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 376
3. 書名 ドイツの歴史を知るための50章	

1. 著者名 ドミニク・ゲッパート、進藤 修一、爲政 雅代	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 192
3. 書名 ドイツ人が語る ドイツ現代史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------